

始

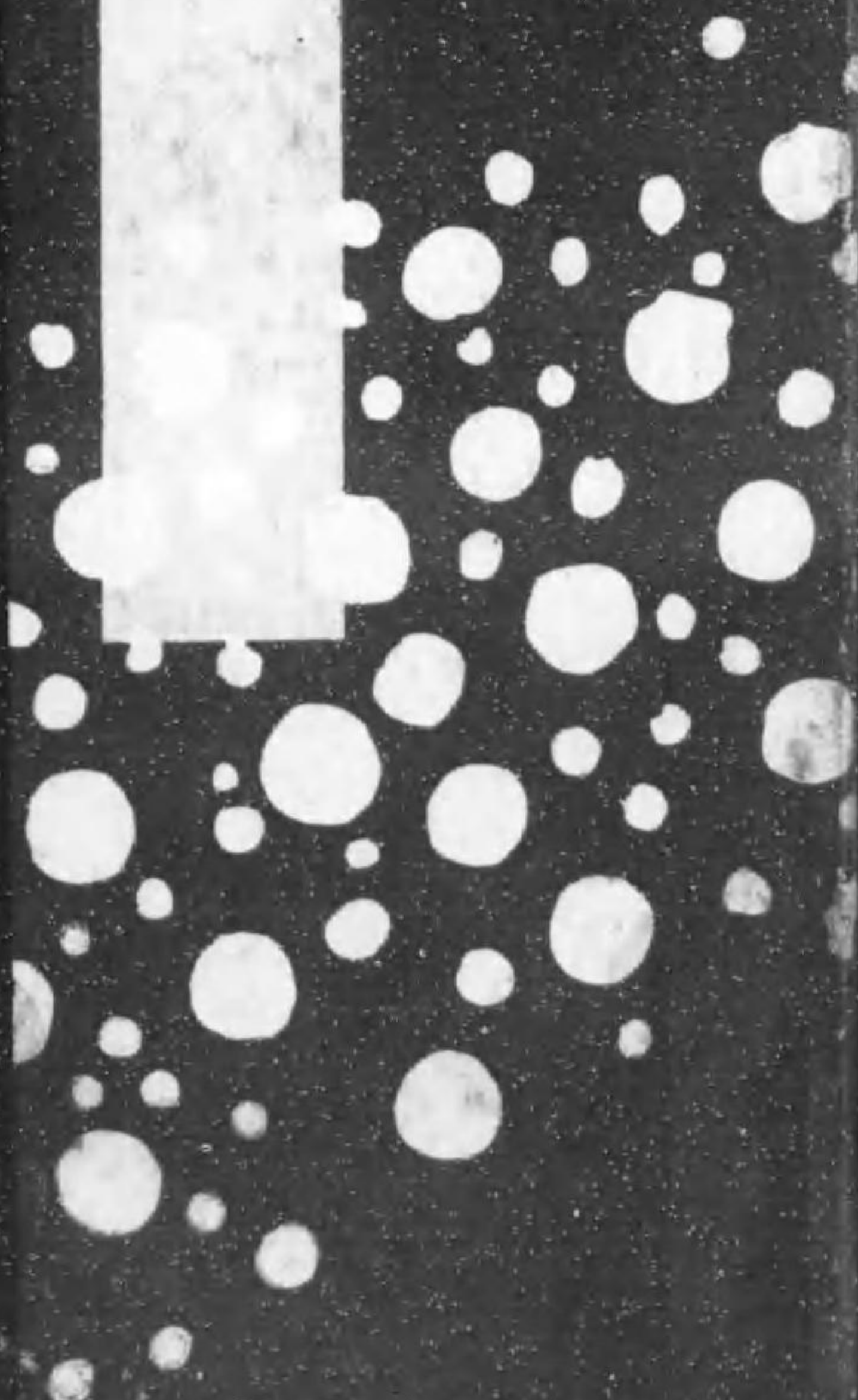
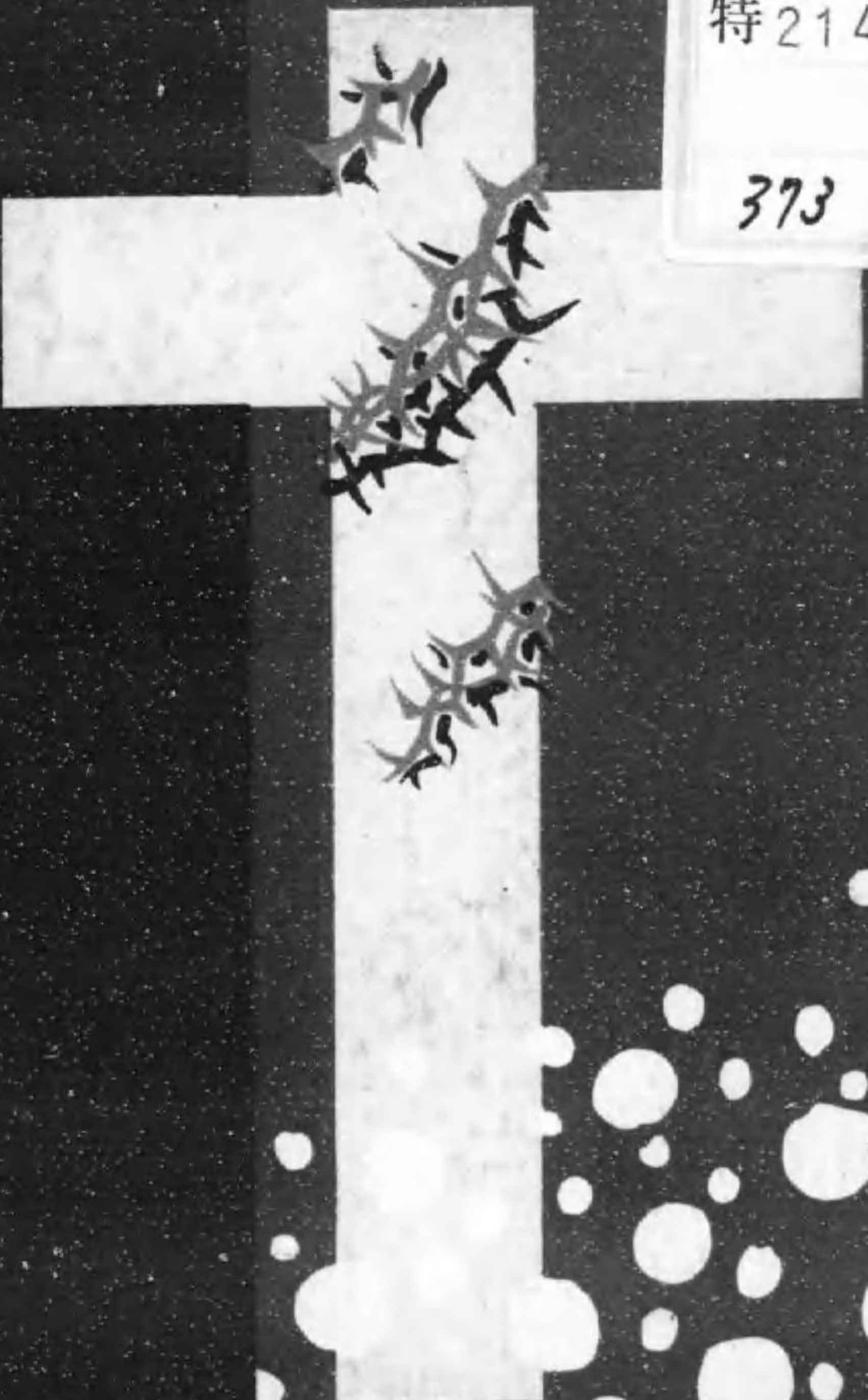


特214

373

大家の父民権の母

宗吾甚兵衛を語る



774

特 4

373

宗吾著



大家の父民権の母

宗吾甚其衛を語る

宗吾徳顯揚會發行

特214
313



大塚の父民権の母
宗子其甚其系を伝ふ

雅信上村翁著



義魂子古



宗吾聖像と宗吾聖堂現真主三野僧正の題字と有影

序

舍生而取義は古來東洋道德の基調にして復以て日本魂の淵源を爲すもの歟、案之、意氣
——極度の暴壓に忍び得ぬ力——弱者の爲めに激しき同情の念——正義の前には己に克つて
粉骨邁進す、是れぞ我邦固有の國民性にして實に大和民族の本領たり。

願れば寛永承應の頃、時正に凶年飢饉に搗て、加へて暴虐飽く無き佐倉領主の苛斂誅求
は日を逐うて彌々酷しく、遂に領内三百八十九ヶ村十萬の生靈を危うするを覩るに忍びず、
宗吾は一芥の里正より起り雷霆の威を畏れず、斧鉞の誅を避けず、肯て制禁を犯して挺身力
訴し一門悉く極刑に處斷せられたりと雖、辛じて領主の覺醒を促し首尾よく素懷は透徹
せられ、爲めに塗炭の苦に呻吟しつゝある領民を蘇生安堵せしめたる義烈偉績に至つては、
優に東洋否世界的義人の典型と謂ふ可し。

嗟々宗吾！生きては民権の祖、東洋救世主と謳はれ、死しては即ち大衆の父、護國の神
と仰がれ、茫々三百歳に垂んとして其の勳は愈々高く、英魂は永へに天空を磨するの大殿堂

に安置せられ、靈光赫々として庶人喝仰の對象となり、延いて千載の後亦能く人心を感孚するものあらん。

現下舉世蕩々或は功利説、或は自己中心主義、或は虛無説、徒らに物質萬能階級闘争等々無神無佛の徒隨所に横行して人心日に危く、道心惟れ失はれんとするの秋、道友上村氏夙に神靈の威徳を讃仰し、詣すること數次、今や斯の著を世に公にすと。然り、行文平易所論詳確眞に要諦を穿つて遺憾なし、於是寔に我意を得たるを喜ぶ、蓋し時代の要求に應ずるの好著なりとす。讀者諸彦、夫れ此れに因て幾多有益なる教訓を得られんことを、茲に一書を物し序と爲す。

昭和五年三月中浣

於 東勝精舍

義洲 三好 照嘉

自序

人物史上より見た日本國民の誇りとして先づ何人に指を屈すべきであるか。

武人としての秀吉、時宗であるか。政治家としての頼朝、家康であるか。

非ず。

學者、文人、英雄、傑士、建國以來吾等が國史の上に燦たる光輝を放つ人物必ずしも乏しからず、而も、古今東西の史實に現はれたる第一人的人物の行動と比肩して其光彩千古に傳へて滅すべからざ

二
るは、わが宗吾、甚兵衛なりと断じて憚らぬ。

ナポレオンの名聲一敗地に塗れようとも、リンカーンの名は人類の父として不朽の生命を保つであらう如く、日本の史上、霸道、權道の第一人的人物に對する尊信が次第に國民の念頭を去る時期が來ようとも、人道の親、民權の父として、宗吾甚兵衛の名は、永遠不磨の光輝を放ち、無限の懐かしみを後世に傳ふべきは、釋迦、孔子キリスト、ソクラテース四聖の生命の不滅なるが如く、また断じて滅びざることを確信する。

宗吾を生み、甚兵衛を出したことはまことに日本のもつ最大の誇りである。而も、劇に、講談に、浪花節に、琵琶歌に、宗吾を見、

甚兵衛を聞くほか、宗吾の心を心とし、甚兵衛の魂を魂として世界に向つて此の誇りを誇らんとするものの、寂々寥々たることを悲しむ。

私は宗吾甚兵衛を仰慕するの餘り、年々その舊蹟たる公津村を訪ね、その神靈に額づくを例として居る。此小冊子は、そのうちの或日の記録である。

方今世相は日を追ふて悪化し、人心は年と共に荒蕪する。一世の儀表となり、一國の指導に當るべき大臣大將の高位顯官すら、國民を愚弄し、國家を荼毒するが如き行動をなして、鐵窓の下に醜骸を横たふるものある始末である。

義のために一身を提し、衆のために一家を犠牲とするが如き崇高悲壯なる宗吾的精神は、全く地を拂つて空しといふべく、將に憂國慨世の徒が「宗吾精神に目醒めよ」との大旗を振り翳して、全國民的警鐘を亂打すべき秋ではあるまいか。

繰り返していふ。貧しき一管の筆に托して、宗吾思慕のやるせない思ひを語つたのが此書である。即ち甚兵衛渡しを振出しに、麻賀多神社、宗吾舊宅、宗吾靈堂、大佛頂寺と（普通は宗吾靈堂を手始めに参拜する）次々にその舊蹟を訪ねつゝ、ありし日の宗吾を偲び、甚兵衛を懐かしんだ簡單な心の記録である。世界に誇るべき此の兩義人に關する詳細なる研究は、何れ他日を期して發表するつもりであ

る。

尙此の小冊子を公にするに當り、題字並に序文を賜はり、且種々御助言を辱なふした、宗吾靈堂貫主三好照嘉僧正に厚く禮謝する。

昭和五年二月二十日

普選第二次の衆議院議員總選舉の行はるゝ日

帝國文化協會にて

著者識

目次

- 一、甚兵衛渡しの感懐……………(一)
- 二、善政のあとを受けた壓政……………(五)
- 三、堀田の暴政と百姓一揆……………(一〇)
- 四、宗吾義のために起つ……………(一七)
- 五、宗吾吾家を脱出す……………(一九)
- 六、久世大和守へ駕籠訴……………(二二)
- 七、渡しから麻賀多神社へ……………(二六)
- 八、妻子離別の悲劇……………(三三)
- 九、身を殺して仁を成す……………(三九)
- 一〇、義人斯くして逝く……………(四四)
- 一一、至誠天に通ず……………(四八)

- 一二、勳は高し宗吾靈堂……………(五一)
- 一三、宗吾精神の目ざめ……………(五五)

(附 録)

- △宗吾靈堂詣で案内……………(一)
- 東京から靈堂へ——宗吾靈堂——宗吾舊宅と麻賀多神社——甚兵衛渡し——大佛頂寺——
- △宗吾靈堂沿革概要……………(五)

挿 畫 目 次

- 一、石に刻せる宗吾靈像 尾形月耕畫(伯筆)と宗吾靈堂現貫主三好照嘉
僧正の題字と肖影……………(卷 頭)
- 二、宗吾甚兵衛舊蹟案内……………(三)
- 三、渡守を促して甚兵衛渡しを横ぎる舟一つ……………(四—五)
- 四、堀田家より宗吾靈堂に奉納せる石塔と、佐倉領内の窮狀並に増税免狀……………(一〇—二)

- 五、水神の森の松の緑に心惹かれて……………(三〇—三二)
- 六、麻賀多神社の鳥居の前を歩きつ戻りつ……………(三一—三三)
- 七、門構へもない無雑作な宗吾舊宅……………(三四—三五)
- 八、舊宅の板縁に腰打ちかけて……………(三六—三七)
- 九、義僧光全の大佛頂寺に参詣……………(四一—四三)
- 一〇、光全思慕の情は増す袈裟掛けの松……………(四四—四五)
- 一一、禮拜後墓前に小憩……………(五〇—五一)
- 一二、英靈永へに鎮まる壯麗目を奪ふ宗吾靈堂……………(五二—五三)
- 一三、宗吾大靈堂を完成せる高僧故田中照心大僧正……………(五六—五七)
- 一四、宗吾靈堂境内全圖……………(五八—六一)

(一) 甚兵衛渡しの感懐

昭和四年四月二十四日。

宵天一碧、名残なく晴れた日だ。

が、風が強い。

颯々として風に戯る、湖畔の松、胡蝶の如く、吹雪の如く荒れ狂ふ落花。

長閑な春の静けさは無し。

此處は、下總國、印旛沼の畔り、六合村の吉高から公津村の北須賀に通ずる、名高い甚兵衛渡りである。

吉高の岸から、渡守を促して、ボツネンと湖面に浮び出した小舟一つ。對岸北須賀の水神の森を指して白波を横ぎり、湖岸一帯の蘆葦の洲を洗つた一陣の春風は、湖面に縦横の白線を引いて右に左に起伏する。

小舟は宛ら木の葉のやう。風浪の弄ぶに任せつゝ、それでも、一寸湖面を滑る。

北を望めば、東から西へ、松崎、安食、木下の丘陵が、緑を含ませた大ハケで一撫でにしたかのやう。その丘陵を臺座にして、遙かの彼方に、大王の如く、筑波山が巍然として雲表に聳え、その翠黛を落した水は、更に南に延びて細く長く續く。

畫趣横溢せる四圍の風光に、更に點晴を加ふるにも似た小さき孤舟は、今しも風浪を切つて湖面の中央に漂ふ。一篇の詩、一幅の畫。

渡守を加へて三人。

私は艦に座して、四方の景色に見入りながら、黙々として沈思に耽り、友は舟の中央に座して、筑波の雄姿を飽かず眺めて居る。



宗吾劇を見た程の人々、劇は見なくとも、浪花節は聞かなくとも、義民宗吾の名を知るほどの者は、甚兵衛渡しの名を懐かしく記憶するであらう。
吉高の渡守、甚兵衛が、宗吾の至誠に感激して、禁を破つて縄を解き、幾度か宗吾を渡したといふのは此の渡しだ。

恰もその時は、今日のやうな花吹雪の日ではなかつた。一度は涼風浴を訪づる夏の夕、一度は嚴寒草木も氷る真冬、満天の風雪紛々霏々として湖面を打つ、真夜中のことだつた。

その同じ水路だ。今しも此の舟が風浪に揺られ揺られて居るのは……。

星霜三百年、義に勇む日本人の精神を象徴した宗吾、甚兵衛の幽魂は、今は靈界に神の位置を占めて活躍する。が、自然の風光は、丘も、水も、森も、其時の面影をそのままに、



渡守を促して其兵衛渡しを請ぎる舟一つ

後人に無限の教訓を與へて居る。

(二) 善政のあとを受けた壓政

思ひは、いつしか二百六十年の昔に飛ぶ。

その頃、下總國佐倉の領主は、堀田正盛といつた。

彼は徳川三代將軍家光の乳母であつた春日の局の縁者で、年少の頃から家光の學友ともなり、主従とは言へ極めて親密の間柄にあつた。

家光の成長と共に、彼の位置もトン／＼拍手に進んで行つた。

家光が將軍職を繼ぐと、彼は一躍老中になつた。彼の才氣と、彼の忠誠とは、家光をして無二の頼むべき人物として信任せしむるに十分であつた。

彼の昇進振りは、當時としては類稀なるものといつてよい。

春日の局の死後も、家光の覚えはいよ／＼めでたかつた。信州松本の十萬石から、佐倉の十二萬石に増封されたのも、局の死後間もなくのことだ。

然るに、好事魔多しと言はるか、慶安四年に家光が薨去したので、彼は四十四の男盛り、働き盛りを一期として、主の後を追ふて殉死した。果報な短い生涯を、劇的な幕で閉じた有名な人だ。

六

正盛は、ともかく英才であつたことは確かだ。忠臣であつたことにも疑ひない。が、もと／＼春日の局の庇護と、その才氣によつて、順風に帆を擧げて榮達した人だ。世情に明るい道理が無い。練達堪能の士といふわけにはゆかぬ。理知一方で、情味の乏しいといふ缺點を免がれなかつた。悲劇の種は此處に宿つて居た。

正盛が、佐倉の城主となつて間もなくのことだ。前の領主であつた千葉氏の善政のあとを

受けて、而も、それとは似ても似つかぬ、思ひ切つた壓政を行ひ始めたのは……

もと／＼佐倉は、七百年來、千葉氏の領地であつたのだ。農民は千葉氏のためには並々ならぬ恩誼を受けて居る。濃やかな一脈の情誼は、永い間領主と農民との間に通つて居る。それは一朝にして滅び去る類ひのものではない。

千葉氏の滅びたのは、豊臣秀吉の小田原攻めの時だ。

北條氏に應じて小田原城を援け、湯本口を守つたのが千葉氏だ。その時の領主は千葉重胤といつた。

重胤は、諸國漂浪の中にその一生を終つたが、宗吾の父源左衛門は此の重胤の家臣で、武勇の譽れ高く主君の死後、暗に主家の再興をはかつて、其亡臣を統合し、印旛沼の開墾を企て、終に土着して農を營んだと傳へらるゝことは、宗吾の義學を思ひ合せて。そこに一脈の因果關係が見らるゝのは面白い。

千葉氏は武運拙くして亡びたのだ。失政のためではない。農民は一樣にその情誼ある政治を謳歌して居たのだ。そこへ現れたのが堀田氏である。

千葉氏並に行つたところでもとくだ。もとくどころではない、千葉氏に對しては七百年來の農民たちの愛着がからみ付いて居る。此の情誼の上に出るには堀田氏としては並大抵の善政を施したのでは追付かない。

此點が世情に暗い正盛にはわからなかつた。殊に彼は老中にもなつた。中央の政治が忙がしい。領内の政治國元の政治がおろそかになつたのも、彼にとつては同情すべき點もある。それも、國元に緊つかりした補佐役でもあればよかつたが、不幸にしてそれは奸臣揃ひだつた。

よからぬことを常に劃策し、密謀するのが彼等奸臣どもの役目だつた。

家光が薨去し、正盛が殉死して、嫡子正信が幼にして家督を相続することになり、國元政治は所謂家老政治となると、彼等奸臣どもは得たりとばかりますますその爪牙を磨き始めた悲劇の芽はかくして次第に成長する。

一代の風雲兒由井正雪が、其の學才と勇武と知謀をたのんで、天下に旗あげを試みたのは恰度この時だ。

一方では、天草の餘黨が諸所に徘徊して、風雲を呼んで居た。

物情騒然たるものがあつた。漸く太平の夢に酔ひしれようとして居た諸侯にとつては一服の清涼劑の價値はあつた。

たかゞ正雪といふ一個の浪人者の謀反ではあつたが、それをしも、大騒ぎしたほど諸侯の腰はもはや抜けかゝつて居た。

「三代にして家滅ぶ」といふ。

戰國時代の洗禮を受け、兵火の間に心身を鍛へて三百諸侯に封ぜられた人々の此の頃は恰度二代目か三代目になつて居る。

堀田の奸臣どもにとつてはよい口實が出来た。彼等は、今にも天下に大騒亂が勃發するであらうことを觸れ廻つた。

そして、正信を欺き、軍用金の徴収を口實にあらゆる苛税の方便を考へ始めた。

(三) 堀田の暴政と百姓一揆

堀田の奸臣どもの爪牙は如何に延びて行つたか。先づ彼等は、第一に新領地の檢地を行つた。そして、地所といふ地所には如何なる瘦せ果てた耕地でも、なさけ容赦もなく規定の税を取り立てた。

次に、年貢米の分延の柵を新らしく改正して増税の目的を果たした。

滞納者があると、それは村民全體の責任として、村民をして辨償せしめることにした。

百姓が新田を開かうとすると、まだ收穫も全く不定の間から、制裁的に新税を嚴課し、村民の連帶完納としたばかりでなく、農工商の片時もなくて叶はぬ、柵の荷ひ棒——天秤棒にまで、課税するといふ苛酷振りであつた。



堀田家より崇吾靈堂に奉納せる石塔と佐倉領内の窮状地に増税免状

試みに、その新たに實施した増税振りを見よう。

- 一、戸間一間に付一文の運上
- 一、十露盤一挺に付一ケ年銀一匁五分
- 一、天秤棒一本一年限り二匁五分
- 但し焼印なき時は過料銀三貫文宛の事。
- 一、疊一疊一ケ年銀二分五厘
- 一、出産後人別加入の硯筆墨料五分
- 一、婚禮の節上中下三段に分ち夫々運上のこと
- 一、牛馬一匹に付一ケ年七匁五分
- 一、家作普請の節は分限に應じ運上のこと
- 一、本年より一割二分増年貢上納のこと
- 一、十五歳より六十歳迄男女一年銀一匁
- 一、何品なりとも賣上金百兩に付五兩の割上納

一、寺院一ヶ寺一ヶ年金一兩運上

以上。

さらでだに、豊沃ならざる印旛湖畔の農民には、これは大なる負擔であつた。若し此の制度が、此のまゝに實施せらるゝならば佐倉藩三百八十九ヶ村、十萬の農民は、たゞ餓死を待つゝのほかはない。

* * * * *

佐倉領三百八十九ヶ村は、惣代を以て減免願も出して見た。いろ／＼に運動もして見た。併しそれは役人どもの豫定の計畫だ、聞き入れよう筈はない。納期は切迫する、納めぬわけには行かぬ。

泣く泣く上納を済ませると、翌年はもはや、其日の生活にも事缺く始末、かてゝ加へて秋の半ばに暴風雨が起り、平年の半分の收穫も無かつたところへ、役所では此の慘狀を顧みぬのみか、税の割符は矢つ張り去年と同じだ。農民達の憤激は極度に達した。彼等は、徒黨を組んで役所に迫り、その暴虐を詰らうとした。

が、これも、人望ある宗吾の説諭によつて、無事に納まつた。役所では、かへつて威壓的に、百姓の分際で、法を犯して訴願でもしようものなら、用捨なく嚴罰に處する旨の廻狀を、各名主總代に出した。重い課税に生くる術を失つた憐れなる農民達には、親は東に、子は西に、夫は南、妻は北と、一家の離散が頻々と起り、中には路傍に餓死するものさへもあつて、慘狀は眞に目もあてられぬ有様となつた。

* * * * *

正保元年六月のことだ。

佐倉領内は一帯に非常な不作で、餓に狂ふた農民たちは、遂に自制力を失つて一揆を起し

たが、宗吾は自ら卒先して外五人の名主總代と計つて救助米を出し、領主から賞詞を受け、苗字帯刀を許された。

一四

彼の義心は、決して一朝一夕に勃發したものではない。

併し個人の力には限りがある。彼の義心が如何に強からうとも、自らの力によつて多數の窮民を救ふわけには行かぬ。

其年の八月に至つて、領内の農民の困窮が一層甚だしくなつたのを見て、彼の義に燃ゆる血潮は奔馬の如く騒ぎ立つた。

彼は役所に出でて、只管窮民のために御救済をと願つた。

併し、大勢のためにとの彼の願は許されなかつたのみか、藩廳の忌避に觸れて、無茶にも留置場に投げ込まれたのである。

領内の苛政は、ますます甚だしさを加へて行つた。

村民たちは、村の鎮守、麻賀多神社の森に集つて、額を宛めて評議した。

併し思慮深い宗吾は、いつも代理者を出して出席しなかつた。確信を掴む迄は、輕舉妄動しない彼であつた。

宗吾を中心人物と睨む佐倉の役所では、彼の宅附近にいつもスパイを放つて警戒して居た。聰明な彼は、何もかもハツキリと頭に映じて居た。

衆望は、期せずして、宗吾の人格、宗吾の識見に蒐り、總代は彼を訪ふて、叩頭百拜して歎願したが、彼は容易に動かかなかつた。

宗吾起たす。

極度の不安に襲はれた農民達は、期せずして本佐倉の北方將門山に集つた。

一揆だ。

彼等の眼は殺氣立つて居た。生きんとする意志の光だ。餓ゆるもの、憐れなものがきだ。

彼等の手には、鋤、鉄、鎌、竹槍、蒭旗と思ひくの獲物がある。傷ついた野獣のやうに、彼等は互に暴戻飽くなき役人輩を罵り合ひ、怒號し合ひ、一團となつて役所へ押しかけようと氣勢を煽つた。

その刹那だ。危機一髪の所だつた。

群衆の片隅から新たななざわめきが起つた。

「宗吾様だ、公津村の名主様だ」

血走つた群衆をかきわけて、邁ぐらに其の中央へ躍り出したのは宗吾であつた。而も見よ。彼の双眼は、かゝる際にも、尙湖水の底のやうな静かさ穩かさ、愛の光に満ち／＼て居るではないか。

高臺に上つた彼は、高らかに聲をはげまして群衆に叫んだ。

「今度の苛税撤廢については、いろ／＼の事情のために、未だお役所のお取上げが無い。役所の不誠意に憤慨して居ることは、私とても諸君に譲るものではない。

しかし、斯く徒黨を組んで役所に押し寄せることは誠に穩やかならぬ事である。若し此の

まゝ押し寄せて行けば暴徒の譏りを受け、理に勝て非に敗け、叛逆者と見られ、國法上赦されない。従て多數の犯罪者、犠牲者を出さなければならぬ。

すれば諸君はともかく、家族にまでも累を及ぼし、決して策の得たものではない。

今日迄は集會毎に列席せず諸君に對し甚だ不誠實のやうであつたが、事茲に至つては自分にも少しく頭に浮ぶことがある。及ばずながら他の五人の衆と篤と相談の上諸君の希望を満足せしむべく努力するから、今日は此の六人の總代に一任して心置きなく解散してほしい。此の情理を盡した宗吾の發言にはもとより何人も異存のあらうわけはなかつた。殊に宗吾の人格に傾倒し、その出馬を早くから待ち望んで居た人々の事として、宗吾の此の申出でに悉く推服して、日没と共に三々五々その住家へ歸り去つた。

時に承應 元年九月

(四) 宗吾義のために起つ

義人宗吾は深く心に決意した。必ず成す！ 彼は、今や大衆のために憤然として起つた。

佐倉領五人の名主總代と共に、彼は税制復舊の訴願を提出し、彼等一同の推薦によつて代表者となり、唯一人城下の宿屋に滞在して命を待った。

が、堀田の奸臣達には、血も涙も無かつた。無情にも願書をそのままに放置したのみでなく、かへつて領民を威嚇する始末、訴願の貫徹を見るは、果して何れの日なるや豫期せられない有様だつた。

佐倉では、到底訴願貫徹の望みなきことを知つた宗吾は、今はたゞ一身を殺して萬人を救ふ唯一の道、將軍家へ直訴のほかなしと決心し、竊かに佐倉を脱出して、吾家に潜み、江戸に出づる時期を覗つた。

宗吾が直訴の決意は、役人達もうすく感付いた。暴政を公儀に知られては一大事とあつ

て、彼が行方の詮索は次第に嚴重さを増して行つた。

優れた宗吾の人望と、一身を犠牲にして萬民を救はんがために起つた宗吾の義舉に感激せる佐倉の領民達は、誰一人、盲目的な利慾のために彼の隠れ家を役人に訴へ出づる者は無かつたが、併し危険の刻一刻と迫りつゝあることを宗吾は逸早く感知した。

「此のまゝ捕へられて、牢舎へ投ぜらるゝか、斬罪に處せらるれば、十萬の同胞の生命は誰が救ふ」

宗吾は、憂悶焦燥の情に堪へなかつた。

(五) 宗吾吾家を脱出す

それは或眞夏の黄昏時であつた。

思ひ餘つた宗吾は、公津村臺方の吾家を出で、二十七八丁あまりの水神の森へ出た。

佐倉の本道避け、此處の渡しから對岸の吉高へ渡り、迂回して江戸に出づべく決心した。今、甚兵衛の渡しと呼ぶるゝ此の渡しは、其頃はまだ水神の渡しと呼んでゐた。

二〇
甚兵衛渡しとは、當時吉高に住まつてゐて、此の義舉を助けた、老渡守甚兵衛の名をとつて、後人がつけたのだ。

今しも甚兵衛は、大佐倉の沼役所から、續々として中川、岩橋、下方の沼縁を傳ひ、葦葦の茂みを分くる螢火のやうな松明を見て、適切り、名主宗吾を捕縛する捕方と睨み、これも陰に陽に宗吾の義舉を助けて居た下岩橋村の光全和尚を訪ひ、更に宗吾の宅に注進して行違ひとなり、そのまゝ宗吾のあとを追つて湖畔で追付いたのであつた。捕方の松明は間近に迫つて居る。

危機一髪！

甚兵衛は言葉もかけず、渡しに馳せて、有合ふ舟の繫繩を解き、
「オーい、旦那様ア!!」
と叫んだ。

宗吾が舟に乗り移つた刹那だ。逸早く横飛びに駆付けた捕方三人。
「其處動くな!!」
と大喝した。

「名主様ア、ナニ大丈夫!」

落ちつき拂つた甚兵衛、一棹突くと、舟はする／＼と沼の中へ浮び出た。
折柄、月は中空にかゝつて、冴々とした光を二人の義人の上に投げかけた。

(六) 久世大和守へ駕籠訴

甚兵衛の義侠によつて、危ふく細目を免がれた宗吾は、廣沼を渡つて對岸吉高村へ著いた。薄の穂にも魂を消す落人の身だ。

彼が、舟で印旛沼を越え、佐倉領を避けて、布鎌、船橋路を経て江戸へ着いたのは、公津村の家を出て、三日目だつた。

目的の江戸へ足を踏み入れた彼は、淺草の旅人宿に滞在して、訴願の運動に取りかゝつた。

佐倉藩の暴政に驚き、宗吾の義侠に感奮した上野の執綱凌雲院圓樹は、彼に志を達せしむるがために、何かと斡旋の勞をとるべく誓つた。

一方惨めな國元の消息は風の便りに知られた。

國元の上總下總の兩國はまるで戦争の體で、家を棄て、田畑を棄て、足弱共の手を引いて土浦領、鹿島領、三浦領へと、泣きの涙で落ち行く者は日々引きもきらず、牛や馬、農具から味噌、醬油、凡そ今日の稼業をして、命を繋ぐ品々に、何一つ税のかゝらぬものはない。拂ふ力の無いものは、撲ち毆きの半殺しの目に遭はされた揚句、水牢の憂目を見る。聞けば聞くほど身の毛の悚立つ話。

「故郷に残した女房子どもは現在どう有らう？ 血を吸はれ、膏を搾られ、骨と皮ばかりの餓鬼道に落されて、猶且つ生きもやらず、死もやらず、是れから先幾年の後、恐らくは彼等が生涯を通じて、其の水火の責に苦しまねばならぬ。」

義のため、人のために、一命を投げ出したほどの宗吾、恩愛の情はまた一入切なるものがある。

宗 吾

江戸城、西丸の大手の方から煤竹羅紗の角取鞘、太刀打、梅檀卷の槍の頭が微見えて、續いて篆書の久の字繋ぎの駕陸尺の襟印が、旭光を斜に受けて進む。

將軍家に於ける、奥向切つての權勢家、久世大和守の行列だ。

今しも駕が、櫻田門近くに練り來つたとき、物蔭から、驀進に、バラ／＼と駈寄つた一人の男、

「お願でござります」

と一聲、三尺の青竹に挟んだ訴狀を捧げた。

「控へろ！ 駕訴は叶らん！」

言ひつゝも、お駕の戸は内から開いて、願書は取り上げられた。

大願成就！

竹杖を投げ棄てた男は、ヒタと大地にひれ伏して、ハラ／＼と落涙した。
男は、木内宗吾であつた。

……
將軍家への直訴の機會が、容易に得られないため、將軍家側近の權勢家、久世大和守の袖にすがつたのだ。

此の訴狀には、さすが久世大和守も、いたく惱まされた。

一方では宗吾を取調べ、一方では、内々佐倉領へ人を派して聞き糺すと、訴狀の通り、重斂苛税殆んど到らざるなく、生計の立たぬ者は他國へ落ちる。夜逃げをする。中には盜賊に墮ちて、刑罰に遭ふといふ淺猿しい體たらくだ。

といつて、これを有りのまゝに將軍家の耳に入るれば、堀田家は一も二もなくお咎を受け

ねばならぬ。——由緒ある家に疵の附くのも不本意だ。

「厳しく内々で意見をしよう……」

久世は、堀田の用役を喚んで、其の非道を戒め、主人へよしなに忠言すべきことを勧め、此度は内濟として、宗吾を國元へ引とらすべく約した。

一方宗吾を喚んで、

「堀田の用役を呼んで、其税制を改むべきことを嚴重に申渡したから、此度は先づ訴願を見合せ事を内濟にして引取るやうにせよ。

猶ほ悔改むることなくば、其方等の再願を待つ迄もなく、嚴格の處置をとるから」

と懇ろに説諭した。

……

大願成就と喜んだのは束の間だつた。

これを聞くと、宗吾は、もはや絶望であると浩歎した。

久世のいさめ位で、到底聞き届けられることの不可能を信じたからだ。

用役から城主への傳達すら危ぶまれる。併し此上は第二段の思慮を廻らすのほかに道はない。

彼は、厚く禮謝し、且つ後事を惻願して宿へ引きとつた。

(七) 渡しから麻賀多神社へ

不吉な宗吾の豫想は適中した。

久世の忠言などは馬の耳に念佛だつた。

領内の苛税聚斂ますく手酷しさを加へて行つたのみではない、國元では、宗吾の首に數百兩の賞金が懸けられた。

宗吾の歸國を待つて、咬ひ蒐らうとする豺狼の如き捕方は、何れもその毒牙を磨いて居る身を殺して東奔西走、居所一日も安からざる艱苦を嘗めて、萬人のために盡したその報償は、たゞ國元に待つ劍と繩目とのみだ。

神ならぬ身の宗吾は、故郷公津村に向ふべく、江戸を立つた。

本来ならば行徳から佐倉を経て、成田街道に向ふのだが、萬一を慮つて、偵吏の目を盗み、行徳から間道を辿つて、吉高に出で、水神の渡しへかゝつた。

「懐かしい渡し守の甚兵衛が居る」

江戸へ立つとき、彼の義侠によつて細目を免がれた記憶は、宗吾の胸に新らしい。

「旦那様ア、好うまア無事で居て下された」

懐かしげに一禮する甚兵衛。

「おゝ甚兵衛！ 先度はのう……」

曩の日の彼が厚意の嬉しさ、宗吾の眼には涙が止めどもなく落つる。

時は十二月十八日。

雪に曇つた折柄の薄月夜は、世の果敢なさを身にうけた、此の哀れにも莊嚴な兩人の面を蒼白く照らして居る。

三百年の星霜の隔てこそあれ、春と冬の相違こそあれ、晝と夜との時こそかはれ、甚兵衛が宗吾を乗せて、悲しい物語をしながら渡つたのは、恰度此の同じ場所がなあらう。

思へば、此の小舟さへ、其時の舟でもあるかのやうに懐かしい。

艦に座して、今し竹棒をとる渡守の姿をちつと見入りながら沈思黙想する。

義民甚兵衛の姿が思ひ起される。

義民宗吾の人となりを懐かしみ、甚兵衛の義侠を慕うて、彼が宗吾を送つた其道筋を、そのまゝに辿つて、今日しも私は、友と共に、すゞろ懐舊の情に浸らうとするのだ。

私どもは、渡守を相手に、甚兵衛の話に花を咲かす。

宗吾を乗せた甚兵衛も、さぞや船中で、積る話を訴へたことだらう。

「旦那様が、あれから江戸での御心配、上野の凌雲院様のことから、鶴訴の一條まで、此の土地でも、皆熟う存じて居りやすが、其御苦勞の甲斐もなく、村方は日増しに衰亡して

行く許り、——お聞き下さい。此の印旛の村方で、御飯の三度喰へる者つたら、十本の指を折る程もありません。

「烏や雀はおろか、野良に居る犬さへ、一匹残らず撲殺して食ひますので、犬や烏や雀でも、此節は一匹一羽も居やしねえ」

斯ういつて農民達の窮状を訴へたことだらう。

それに、宗吾の宅の近くには、見張やら岡ツ引やらが、始終うろついて居て、油断の出来ぬことも告げたに相違ない。

宗吾の妻のおキンは、其頃の熱病、今でいふ腸窒扶斯にかゝつて、麥粥も吸れぬほどであった。此事も此處で、甚兵衛から聞いたことだらう。

これを聞いた宗吾が、

「せめて一目と来て見れば、宅の傍へもうつかりは寄り附けぬとは、何たる因果であらうか」

と、堰き上ぐる涙を喰ひ縛つたことだらう。

冬寒き沼の夜風は、水の面に寂しく澄んだ音をたて、彼の忍び泣きを幽かに送つたことだらう。

三〇

無量の感慨を乗せて、舟は對岸公津村北須賀に着いた。

疎らに生えた數本の喬松は、水神の森だ。朽ちかけた鳥居が、昔を名残に立つて居る。

松の樹の間を逍遙すると、低徊去るに忍びないものがある。

森の近くに二軒屋がある。一軒は此の岸の渡守の家だ。定めし宗吾の頃からあるのだらう

其最愛の妻子に生別するために、僭行して吾家に歸つた宗吾は、再び此の渡しへ歸るまで

甚兵衛は此の森蔭に、渡舟を繋いで待つて居たことだらう。

梢を渡る物凄しい吹雪の音に、耳を澄ませながら、松の根方に腰打ちかけて、宗吾の身を案

じながら單り悄然として待つ。正直で、義に勇む、頑丈な甚兵衛の姿が、まさしくと見ゆ

るやうである。



水神の森の松の幹に心惹かれて

宗吾の舊宅は、此の湖畔から丘へ出て、二十七八丁のところにある。

私どもは土手を渡つて、宗吾の舊宅に向ふ。

湖畔一帯、まだ芽を出したばかりの蘆葦の洲が、幅広く續いて居る。

宗吾もまた、雪を撥ね上げる熊笹の音にも注意しながら、此の同じ道を通つて、病める妻
いちらしい四人の子に、最後の別れをなすべく、道を急いだに相違ない。

湖畔を辿ること數丁、左に折れて丘陵を登りつめると、甚兵衛渡しの見晴し茶屋がある。

暫し茶屋で憩ふて、人家疎らな北須賀の村を西にとると、船形へ着く。何れも公津村の大
字だ。

此邊の村落は一帯に淋しい。時には數丁の間も、一軒の家すら見ないことがある。

途上に麻賀多神社がある。宗吾の氏神だ。此の氏神から宗吾の舊宅までは儘かに數丁に過
ぎぬ。舊宅の森の頂きが、微かに丘陵を越えて見える。

身を殺して仁をなした宗吾の一生を見ると、彼が如何に強固な信念の人であつたかを窺ひ得る。

あれ程の仁慈、あれ程の勇断は、信念なくしては成し得ない事だ。

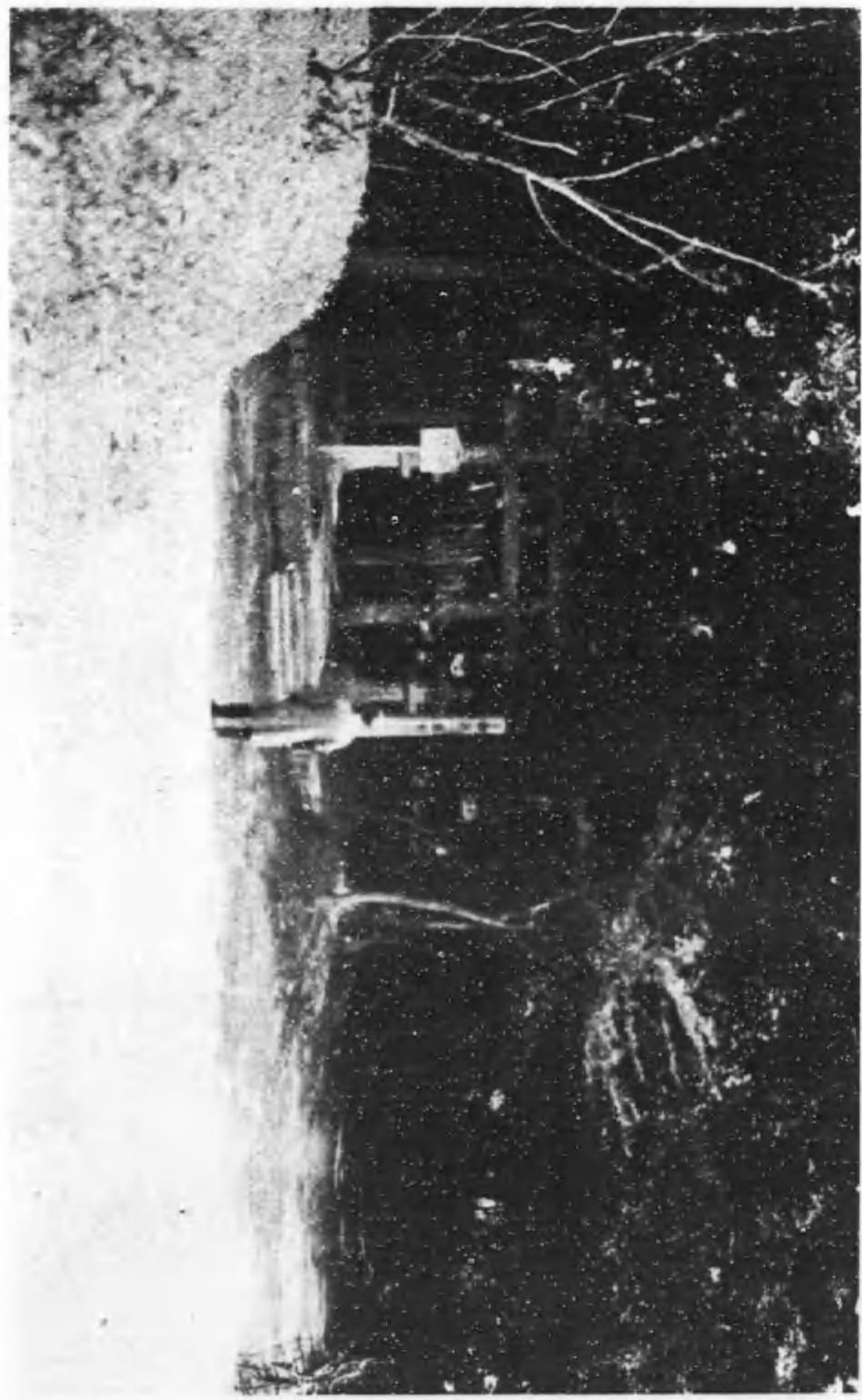
信念の人であつた宗吾が、敬神崇祖の念に厚かつたことはこれまた想像に難くない。氏神でもあり而も家から程遠からぬことであるから、此社へは時々参拜したことだらう。

神を敬し、佛を崇び、靈魂不滅を信じ、永遠の生命を貴んだからこそ、あれ程の大事は決行されたのだ。

宗吾が、まだ單に人望のある一名主として、平和な月日を送つて居た頃は、祭禮の時など此處で村民たちから、「名主様、宗吾様」と交々挨拶された事だらう。

大事を志してからは、思ひ餘つた時、人知れず此の神前に額づいて、あらたかな靈感に恵まれやうと祈つたことだらう。

神前の鳥居の前を、行きつ戻りつ、低徊願望する私の心境には、その時の宗吾の心が、ハツキリと通つて来る。



蘇賀多神社の鳥居の前を歩きつ戻りつ

神社の境内はかなりに廣い、神閑たる古木の間、鬱蒼たる老杉の間に、ベンチなど並べられて居る。今は此の村人の小公園ともなつて居るのであらう。

(八) 妻子離別の悲劇

麻賀多神社から三四丁後戻りして、右側の茶店の傍から、雑木の茂つた濕りつぽい崖を下りると、少しく左折して、崖の腹に、雑木の中に、田地を前にして、平たい古い家がある。これが宗吾の舊宅だ。身の引き緊るやうな敬虔の情が袴々と胸に迫つて来る。

門構へもなく、塙塙一つない無雑作な家ではあるが、城廓のやうに一種の別天地をなして建てられてある。

此の家は、宗吾の父祖傳來の舊建築で、宗吾の生れた家であると傳へられ、軒傾き、柱も稍斜めになつて、一見して流石に古い家だと肯かせる。

南側の細い里道に沿ふて竹藪がある。舊劇に出る宗吾の家そのまゝだ。當主の木内島吉氏は、宗吾の妹の十四代目の子孫で、堀田正盛の孫堀田大藏正順の時、

赦されて此家を復興したのだといふ。

島吉氏の息子由太郎氏夫妻は、野良へ出て留守だといふことであつた。

私は、十八疊敷の廣間の隅に設けられた佛壇の宗吾の位牌に黙禮してから、外側の板椽に腰打ちかけて、主人と四方山を語る。

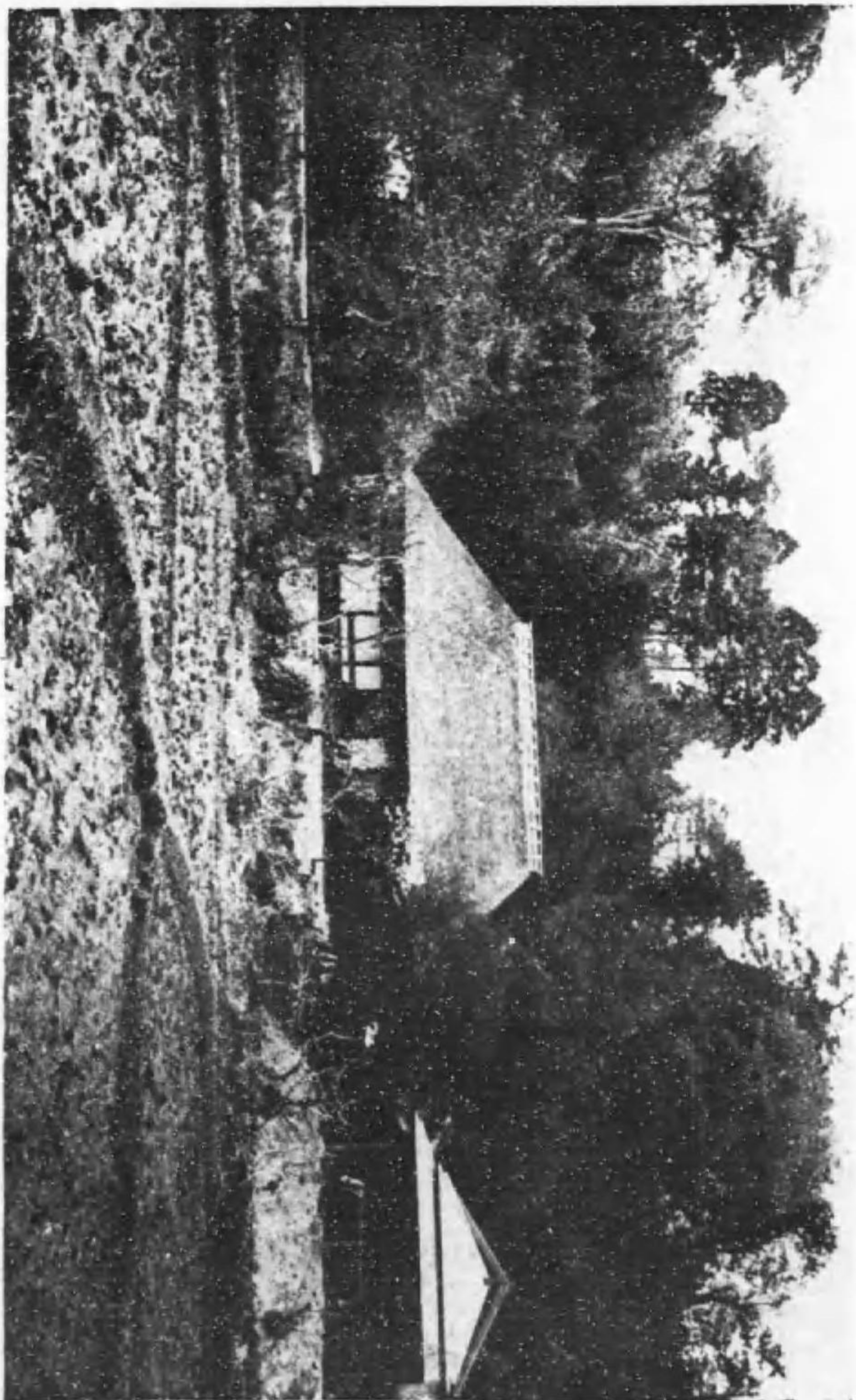
當主の孫に當るいたいけな子供二人が、遠來の客を物珍らしげに、遠くから恐るゝ眺めて居る。

ポケットから、かねて用意して居たお菓子の一袋を取り出して、子供達にわけ與へると、やつと安心したやうに嬉々として私の側へよつて来る。

※ ※ ※ ※ ※

糸立と、菅笠に面部を隠して、巴里と降りしきる雪の中を、甚兵衛渡しから潜かに辿り着いた宗吾も、また此の竹藪の傍から吾家を訪づれたことだらう。

彼は、道々も、雪明りに、懐かしい村方の様子を見ることを忘れなかつた。



同様に、また、無難な宗吾の居宅

甚兵衛の話した通り、惨めなその有様は、夜目にも歴々と見られ、此の夏江戸へ出た時
で、往來の人家に見えた樅火の火光も、今は影もない。皆空家になつたのだ。

吾家の様もその通り、粗末ながら、長屋門であつた其門は、今は半分崩れ落ちて、野地も
棟木も露はである。扉もなければ、音訪うにも及ばぬ。

崩處の穴から悄と見ると、麥打場の奥にあつた木内家の誇り、夜目にも著るき白壁の納屋
藏も、形無きまでに引崩され、飼つてあつた白犬も尾を掉つて迎ひに來ぬ。鶏の羽搏きも
聞えぬ。甚兵衛の話と思ひ合せて胸が迫る。

「や、父様が！」

眞先に目を覺した物領の彦七が飛び起きる。

「え、父さんが？」

姉娘のおホウも駈け出すと、奥の納戸からは母親のおキン、病み著けた瘦體を漸うくと

「ナニ、父様が？ 正真にか！」

言ひながら起き上らうとしてガクリ！ 氣力の無い膝は、骨と皮ばかりの身さへ支へかねて、其處に倒れた。

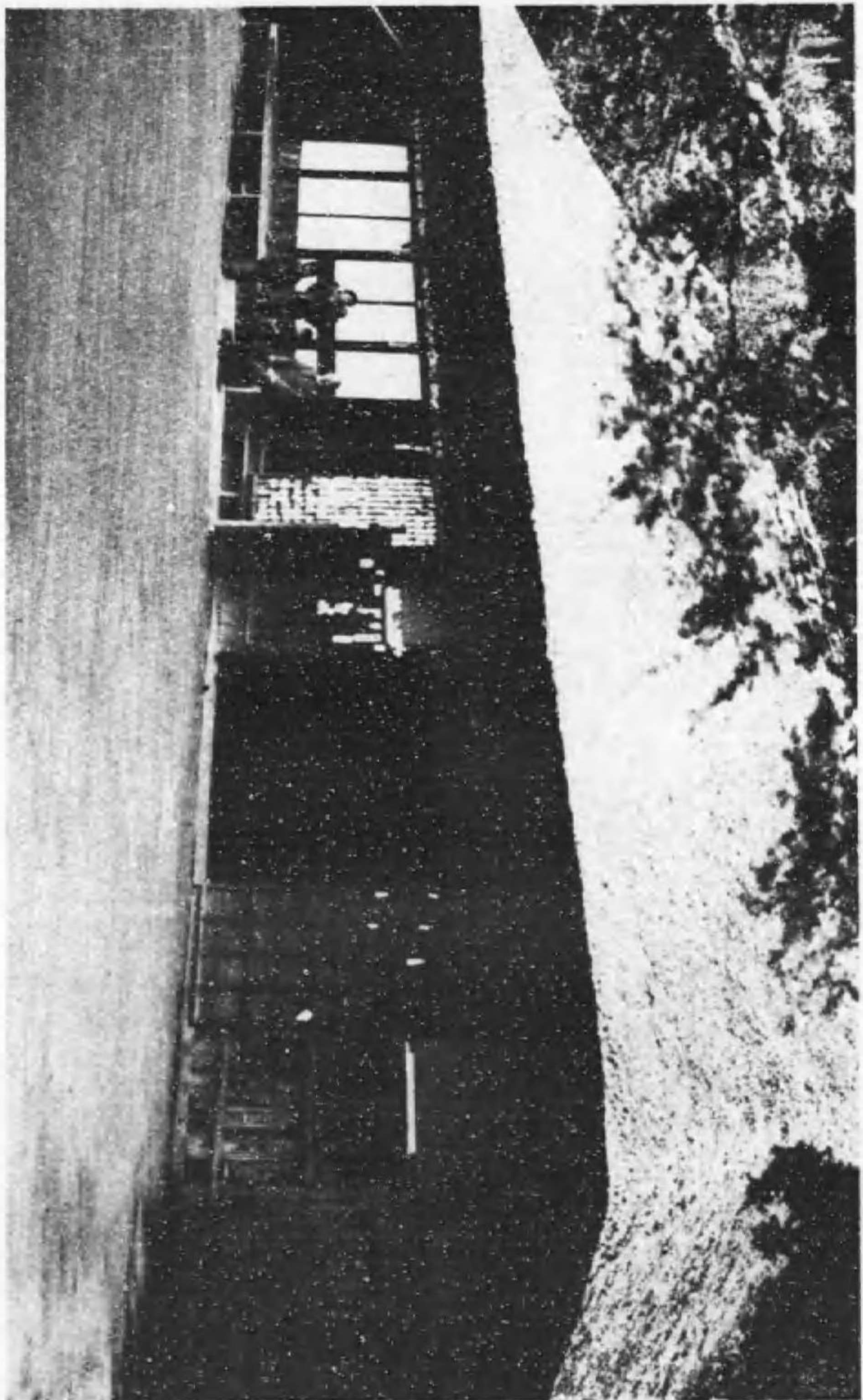
「こりや、ま静かにせい——おうく好う來た。彦も、ホウも、トクも、トチも、よう大きうなつたが……」

四人の男女を一緒に抱へた宗吾、更に這ひ出した女房の、病み窶ばいた手を取つて、

「キンや、こりやもう安心せい。もう其方にも苦勞をかけぬから、もう安心して……」
はらくと悲涙が零れる。それをつとめて押し隠して、

「何うちや、食事は些とは進くかのウ。太う窶れたとの話は聞いたが、見ればそれ程にも無い、熱は何うちやかの？」

「はい。——もう此世ではお目にかゝれぬかと存じましたが、それでも、よう戻つて來て下されて。お不在になつてからの家中の難儀、それはもうお話にもなりません……」
歸家つた良人の手に取り附いて、其の艱難の概略をでも語らうとはすれど、粥も啜れぬ病



舊宅の板縁に腰打ちかけて

苦の口からは遂に言ひ得ず、たゞ嗚咽り上げて、よゝと泣くのみである。

.....

二人居た下女にも作男にも皆暇とらせて、田畑の耕作は彦七とおホウとの子供二人を手助けにおキンがする。

能く／＼手の廻らぬときは、大佛頂寺の光全和尚が、遠路老體を運んで、草取りから、肥料まで運ぶ。

恚うして作った辛苦の米麥は十の七八つは役人に取り上げられ、今はたゞ餓死するを待つて居るのが宗吾の留守宅の有様であつた。

※ ※ ※ ※ ※

悲歎に暮れた宗吾が、やをら目をあげた咄嗟の事だ。

家の前の田圃を隔てた間道の方角にあつて、

「どツ」といふ鯨波の聲！

「ヤツ、捕手?!」

宗吾がすつくと起ち上ると、膝にひたおとくとおトチは、

「父さん、怖いよう!」

と泣き叫びつゝ取り絶る。

「御用! 御用だ!」

「御用!」といふ聲と共に、三人の捕方は踏み込んだ。

其れと見た女房のおキンは、病苦も忘れて勃くと起きて、

「貴郎、早く逃げて……。子供は私が預りましたから、さア早く!」

彼女は健氣にも、父に纏はる二人の娘を、我が左右の脇に掻い込んで俯伏した。

「ちや彦七来い!」

恚くても恩愛の情遣瀨ない宗吾は、惣領息子の彦七が手を取らうとするを、先なる捕手の

一人は「捕つた!」と組んだ。

俯伏した面をあげて、きつと見たおキン。

「貴郎! 此處は未練の場所でない。貴郎は大勢の大事な生命、落ちて下さい! 彦坊此方へ来い!」

と叫ふと、伶俐な彦七。

「では父様行つて呉れ。坊はもう死んでも可い!」

「ヤツ!」と叫んだが思ひ直した宗吾。

「おう! 好う言つた。未來だぞ! —— 未來で遇うぞ!!」

涙を拂つて一散に馳せ去らうとする。

「逃げるな! それ捉へろ!」

捕方はばらばらと後を追ふ。

(九) 身を殺して仁を成す

宗吾は、闇にまぎれて、甚兵衛渡しの邊り、水神の森まで一散に逃げた。可愛い妻子を捨てて……。

萬人に優れた血と涙とに恵まれた宗吾が、身にも換へ難い女房子の、捕手のために縛められて、果ては入牢の責苦を受けるのを、今日のあたり見つゝ知りつゝ逃げたのだ。

「あゝ、大勢のためだ。」

おキンが勵ました領民の生命は貴い。

身にも換へじの女房子の生命を、佐倉十萬の領民の生命にかへ、今棄てたい吾身の生命をも、僅かの後日に延ばさねばならぬ。

渡頭に待ち受けた甚兵衛は、すワとばかり、ひらりと渡船に打乗つて、右の鉞もて繫繩を

「ウン畜生！」と打斷つた。

「ソレ、お乗んなせい！」

辱けなしと乗り移らんとする刹那。

「御用ツ！ 動くなー！」

捕手はもう追ッ續いた。

「何ッ！」

甚兵衛が振つた大鉞、サツと闇に瞬いて、捕方の腦天を打挫いた。ぱツタリと倒るゝを見て、一棹入れた甚兵衛。

舟はする／＼と湖面へ浮び出た。

「ぢや旦那、俺ら此邊でお別れしますだ。確つかり囁んだぜ！ 一步先へ、冥途で待つて居やすだよー！」

言ひ終らざるに、甚兵衛の姿は、もう舟からかき消されて居た。

吹雪颯々たる湖面に、夜目にも波紋を描いて、義人甚兵衛の骸は沈んで行く。

義のために禁令を犯し、人を殺した彼が、その最後のまた如何に莊嚴なるかよ。

宗吾は、今の今まで、甚兵衛が持つた舟棹を手にして、暗然として涙を呑んだ。

(註)宗吾の舊宅については異説がある。

現在舊宅と呼ばれて居るものは、宗吾の妹のハツが宗吾の家を繼いだのではなく、妹自身の家であつたのだ。

宗吾の住宅のあつた跡は、此の家の北方にある今理兵衛屋敷と呼んで居るものだといふ。

宗吾は父子共に死刑にされた程であるから、家屋は勿論、所有の土地は悉く公收されたので残つて居るわけがない。恐らくは此の説が眞實であらう。

盡きざる名残を惜んで、宗吾の舊宅を辭した私は、濕つばい雑木の茂つたもとの崖を上つて、本道に出で、角の茶店から左に折れて、宗吾靈堂に向つて出發する。道は、森林の間、畑の間を、迂回曲折して廻々として續く。

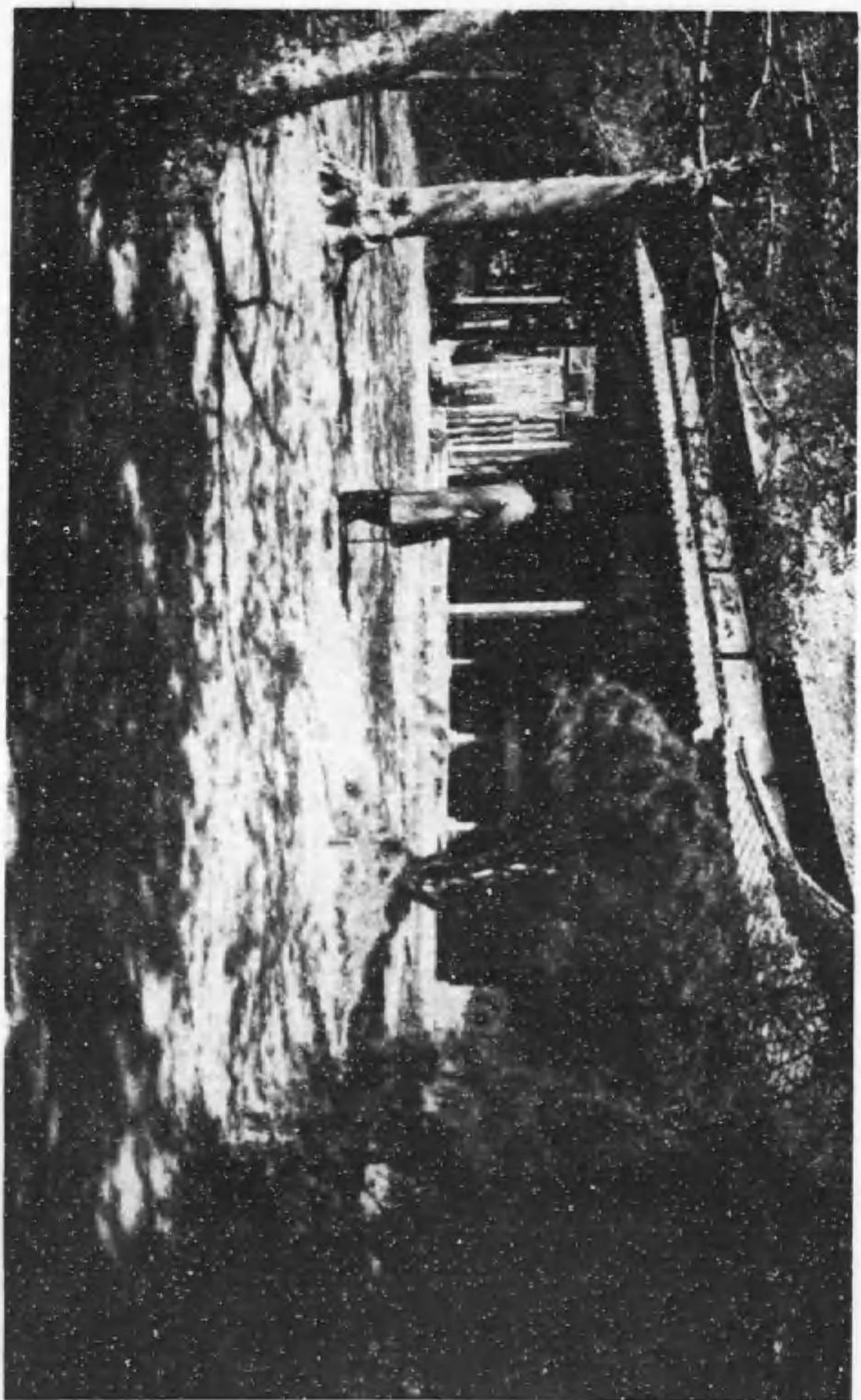
これから靈堂までは十七八丁、人家は稀であるが、林間に今を盛りと咲き誇る櫻花は、義のために散つた宗吾を象徴して床しい。

靈堂に着いた。

靈堂を拜する前に、下岩橋村の大佛頂寺を訪ふべく、更に道を西南にとつて進む。

大佛頂寺は、義僧光全の寺。光全は、宗吾の血縁の伯父に當ると傳へられて居る。

靈堂から十二三町、酒々井町に通ずる街道に沿ふて進めば、左に邱腹を下つて、南面して



義僧光全の大佛頂寺に参詣

大佛頂寺がある。

今の本堂は、往昔庫裡であつたもので、大きくはないが、境内はなかくに廣く、弘法大師の舊刹として佐倉五大寺の一である。

邱樹を背にし、青田を前にして、春風が本堂を訪づれる。

義僧光全が、朝夕讀經怠らなかつたであらう本尊の前に、黙つと禮拜する。

光全和尚が常用したといふ鶴籠や、宗吾父子の助命の祈願に用ひたといふ舌出しの鈴や、和尚が自ら刀を揮つて刻んだといふ自像など多くの寶物がある。

宗吾一家が、義舉成つて極刑に處せられたとき、義憤した光全は、宗吾の子供の首を奪つて逃れ、偵吏に追はれて遂に投身自殺したが、その時、袈裟を掛けたといふ袈裟掛の松は、是より程遠からぬ湖畔にある。

宗吾一家、處刑の惨ましい情景が、さながらに思ひ起されて、覺えず肅然とする。

(一〇) 義人斯くして逝く

江戸へ逃れた宗吾の其後は如何なつたか。

宗吾の仁義に感動した凌雲院僧正の隠密の導によつて、將軍家上野御成の時、遂に直訴の目的は果された。

直ちに召捕へられて即日入牢、當時の法として領民は領主の成敗に任すとあつて、宗吾の身は堀田家に引渡された。

宗吾を始め一家六人、悉く白洲へ呼び出されて、情け容捨もない責め折檻を受けた後、宗吾は磔刑、倅娘は死罪と、世にも怖ろしい判決は下された。

恚くと聞いた兩總二國の人達は、天地も一度に滅却するかと哭き噪ぎ、宗吾一家命乞の哀訴が、毎日奉行所に降るやうであつた。

殊に、かの大佛頂寺の光全和尚の如きは、自己彼の一家に代つて處刑されんとの一通を捧げて、大手の城門に立ち盡すこと三日三夜、その聴かれざるを知るや、さらばとて其寺に、



光全思慕の情は増す製袋掛けの松

爐壇を設けて、不動が慈救の秘密の法を修し始めた。

最初の一日は股の血を、次の一日は腕の血を、今日の三日目には頭腦の血を、乳木に塗ぶし、爐炎に注いで黒煙をあげて揉み立てる。眞に、われとわが體内の肝膽を碎く修法である

※ ※ ※ ※ ※

おゝしかし、天なり命なり。

光全和尚が、生命にかけての願ひも容れられなかつた。

佐倉領民、各村連印の助命嘆願書も、領主の容るゝ所とはならなかつた。

時は承應二年八月三日。

今の宗吾靈堂の地、公津ヶ原の夕陽、血の如く燃ゆる黄昏の頃、宗吾父子の處刑は行はれた。

矢來の外には數萬の男女が蝟集して、念佛の聲が怒濤のやうに流れた。

磔柱の上に縛し上げられたのは、見よこの瞬間より以後幾萬年に其名を誣はるべき、宗

吾の壯嚴な姿だ。神色自若として、萬人の生命にかはる喜びが、彼の面上にたゞよつて居るではないか。

四六

柱の下に、菰の上に、神妙に手をついて役人の讀み上げる判決を聞くは彼のいたいけな四人の子女だ。

判決が終つて、正に獄卒共の刀が閃かんとするとき、長男の彦七(十一歳)は役人に向つて泣きながら縋んだ。

「私が先では父上に御心配をかけます。どうぞ父上御最後の後に殺して賜はれ……」と。

次女のトク(九歳)は、自分の死も厭はず「私たちは如何様にお仕置なりませうとも、どうぞ父上だけは助け賜はれ」と父の助命を哀願した。三女のホウ(六歳)は恰度その時、頸の右側に腫物が出来て居たが「右側は腫物が痛いから、左から斬つてよ」と役人に頼み、四女のトチは僅かに三歳の頭是なさ、見送り人から見舞にとて送られた桃を食べつゝ此の凄壯不思議な風景を眺めて居た。

生きながら神の如く、その五體は赫々たる圓光に包まれたるが如く、磔柱の上から、自

若として群集に目禮する宗吾の口から、突如として言葉が發せられた。

泣きぬれた群集は唾を呑んで水を打つたやうだ。

「聽け!! 末期の願ひ、一言村々の衆に別れの言葉をとて、彼が役人の許しを待つて高らかに叫んだ、その貴き聲を。」

「諸君のお心は天に通じ申した。お年貢米並に御運上が、前々通りになつたのは何よりも喜ばしう。」

就ては、諸君にも一言、宗吾最後の願ひがある。どうぞ此上は、一倍仕事に精出されて、決して年貢米の未納等をなされぬやうに……」と。

叫び終つた彼は、莞爾として眼を閉じた。

やがて、矢來の外に、一際高く、群集の念佛のどよめきが起つた。

その刹那、宗吾の乳下から肩先かけて、獄卒共の素槍は貫かれ、同じ刹那に、あはれいたいけな子供達の首は落ちた。

その時、矢來を越えて、疾風の如く馳せよつた一人の僧、
獄卒どもが、「あなや！」と驚き燥ぐ間に、手近の子供の首一つ、とる手も早く電光の如く
逃れ去つた。

僧侶は、かの光全であつた。

(一一) 至誠天に通ず

一家骨肉の生命を、擧げて犠牲とした宗吾の博愛洽慈の心は、やがて報いられた。
宗吾を處刑した後、藩主堀田正信は、藩内の整理に着手し、正邪曲直を明かにし、國詰
家老池浦主計、及藩士金澤文右衛門など、主を唆かした苛政の張本人は、共に改易を命ぜら
れ、其事に與かつた二十餘名の藩士は、悉く嚴罰に處せられて、さすがの悪政もばた／＼と
改められ、上下和樂の繁昌は、兩總の地を再び訪づることゝなつた。

※ ※ ※ ※ ※

藩主堀田正信の愛妾に秋子の方といふがあつた。

貞淑 温良、玲瓏玉の如き美人であつたが、臨月に向つて發狂し、花の十九歳を一期とし
て狂死した。

此事あつて悲嘆、憂鬱の幾日かを過した結果であらう。正信もまた亂心し、單身江戸城を
抜け出して佐倉に歸城し、罪なき家來女中等を手當り次第に斬り殺した。

幕府も捨て置く譯にはゆかぬ。直ちに老中閣議は開かれたが、正信の父正盛の功績もあり、
結局寛大の處分をすることになつて、佐倉の所領十三萬石を沒收して信州飯田の一萬石に
配流した。

これが、後世、宗吾の怨靈の結果であると傳へらるゝに至つた事件で、今歩兵第五十七聯
隊となつて居る舊城の中には、現にお化け屋敷と稱する所がある。

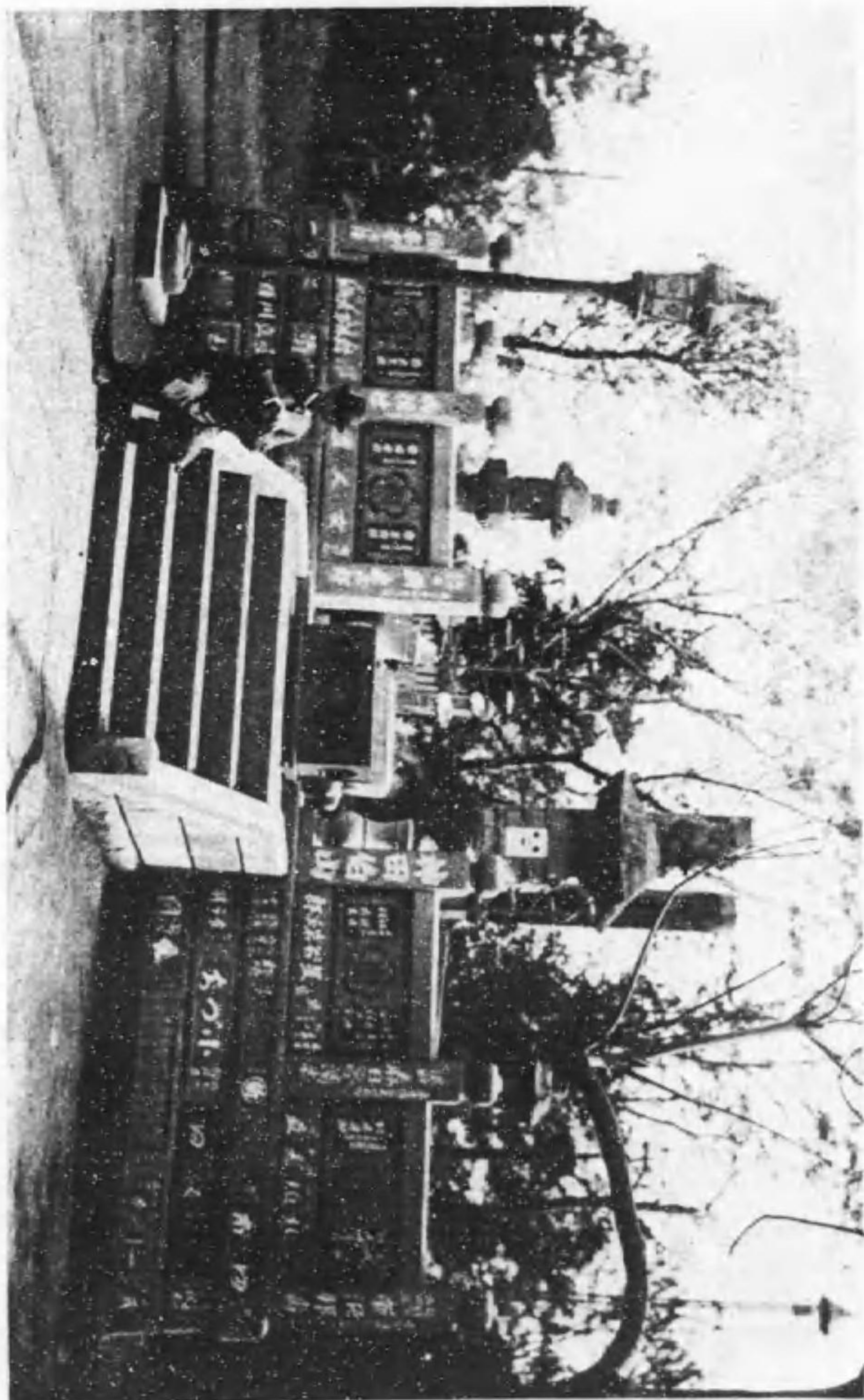
併し此の解釋は、宗吾の偉大な人格をかへつて穢すものであることは言ふまでもなく、彼
は處刑せられつゝも、藩主の反省を豫見し、喜んで萬人のためにその生命を捨てたのだ。此
事件は、宗吾の崇高な精神が正信に感應し、正信自らが怨靈を出したと見るべきである。

まことに、宗吾の出現は、單り農民のためのみならず、堀田家の反省のためにも、またとなき良い氣付薬であつた。

佐倉城の東、將門山には、正信の手によつて、口の宮神社が建てられ、宗吾の靈が祀られた。

歴代の領主は、年々八月三日の命日には盛んなる祭典を行つて宗吾の偉靈を慰むる例となつた。寶曆二年の八月三日の百回忌に際し、堀田家から涼風道閑居士の法號を贈り、更に享和二年百五十回忌には徳満院の三字を加贈し、石碑を刻んで宗吾靈堂に寄進した。

一方江戸淺草の金藏寺堀田家の菩提寺には壯嚴な祭壇を設け、宗吾の菩提を弔つた。現に淺草の金藏寺の過去帳には宗吾父子の戒名がある。宗吾の靈に對する謝罪方法に就て、領主が如何に苦心したかを知ることが出来る。



禮拜後墓前に小憩

「一生の功罪は棺を蓋ふて定まる」

彼宗吾の雄魂は、人類の續く限り永遠に大衆鎮守の靈神として崇め貴ばるゝことであらう。

(二二) 勳は高し宗吾靈堂

私は佛頂寺を辭して、島の間を走る里道を真直ぐに宗吾靈堂へ引返した。

靈堂の入口、右側にお墓がある。香煙縷々として絶ゆる時がない。

宗吾の偉靈を慕ふて參詣する人が、今日も亦引きもきらぬ。

墓側に桃の木がある。里人は喰缺けの桃と名づけて居る。

宗吾の四女三歳のトチが、見送り人から贈られた桃を喰べつゝ處刑されたことは前に述べた。そこへこの桃の形が、喰ひ缺けのやうに不思議な形をして居るところから此の名が出たものだといふ。

莊嚴な靈堂の前に額づいて凝つと黙禱する。現在の堂宇は、結構壯美を極め、工費百萬圓、大正二年工を起し、大正十年完成したもので、全國の信者の義捐によつて、成つた宗吾思慕

の具體化である。

始めて靈堂の建立されたのは、萬治年間のことだ。

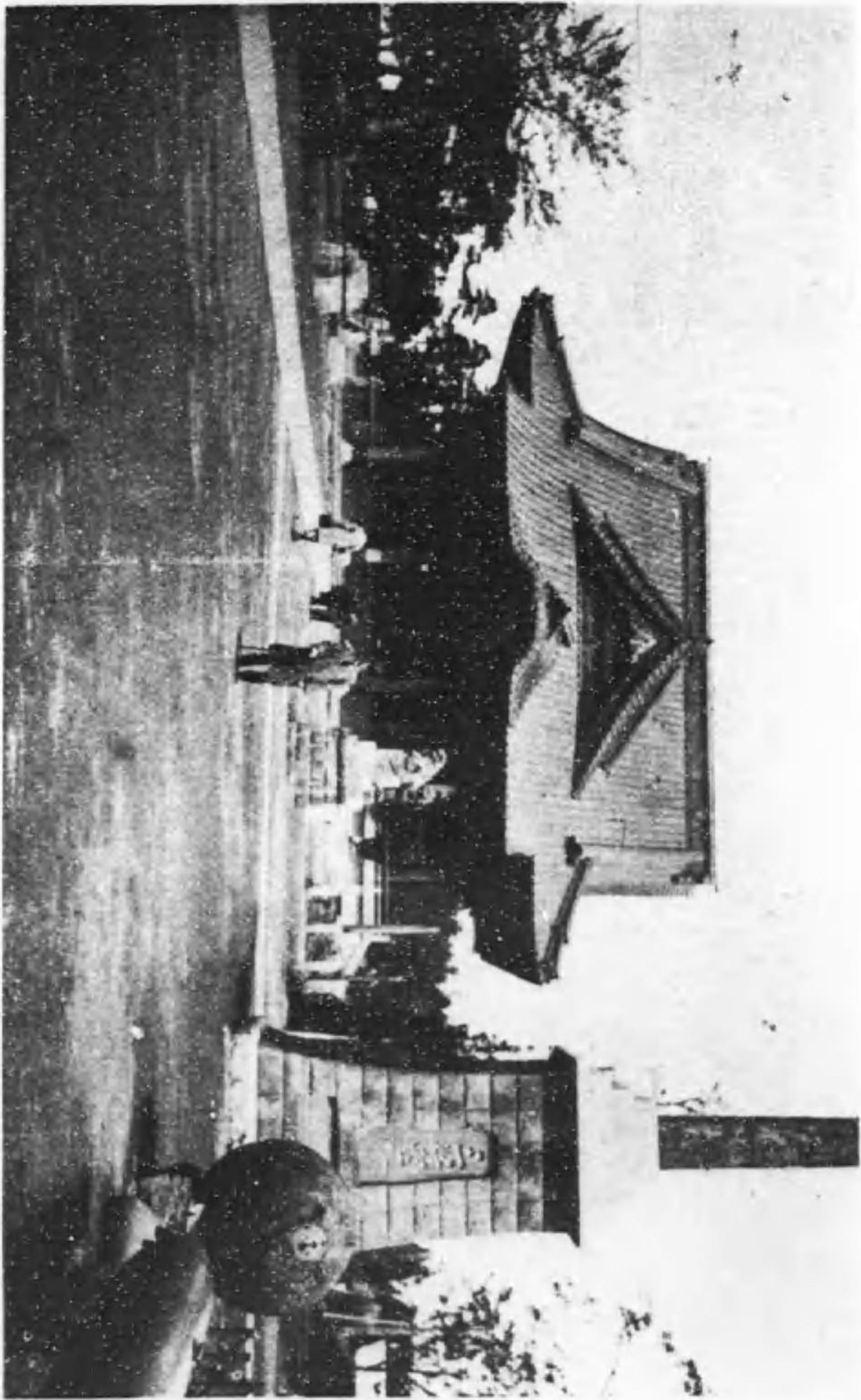
宗吾父子が處刑されて後七年、萬治三年三月のこと、領主堀田正信は、領民一般に救米として、高一石に付二割の免定をした。

この發令をうけると、領民は昔思出の涙に暫らくは顔も得上げず、痛切に宗吾の鴻恩に感激した。

此の感激の念を、記念するがために建てられたのが宗吾靈堂である。

後、文政十三年八月に、堂宇を改築し、更に、明治九年に、東勝寺住職であり今は故人となつた田中大僧正は、二重椽四方棟、七間四面の總檺造りの堂宇を再建し、明治二十三年に竣成したが、明治四十三年の九月、門前の南方から火を失して類焼の災に罹り、さすがの大伽藍も一朝にして灰燼に歸した。

恰もその時、大僧正は、齢既に古稀に近かつたが、一意再建の大願を發起して、遂に、今日の堂宇の完成を見るに至つたのだ。



宗吾靈堂の完成

靈堂の右側にある五靈堂は、宗吾と共に總代となつて訴狀に名を連ねた五人の人々を祀つたものである。

此の五人の人々は、宗吾の處刑後剃髮して僧となり、宗吾父子の冥福を祈つて各地を順禮したといふ。その終焉の地の何れも明かでないのは遺憾である。

靈堂の裏、森の木立の間に、甚兵衛の小社があり、そこから右折して宗吾御一代館に至つて、二十錢かの入場料を拂ふと、宗吾の一生の目星しい各々の場面を現はした人形を見るこ

とが出来ゝる。
靈堂の前、右手の廣場には、近き將來に本坊の大廣間が建立されることとなつて居り、更に、敬神崇祖會の幹旋により、此の靈堂を起點として、靈堂詣での各驛並に佛頂寺に至る沿道、更に靈堂より麻賀多神社、宗吾舊宅、甚兵衛渡し、等に至る沿道に數千基の燈籠を献納する企圖がある。

是等が完成の曉には、眞に壯麗目を奪ふべく、國民舉つての宗吾思慕の衷情は、形の上にも表現らせて、名實共に世界に向つて誇り得ることとなるであらう。

劇、映畫、浪花節、淨瑠璃、義太夫と、宗吾の一生を題材とするものは、多く佐倉領の宗吾といはずして、一言にして佐倉宗吾といふ。

その結果、宗吾に由緒ある地は、今の佐倉町であると誤解する向がある。現に、宗吾を思慕、尊信して、其の靈堂に詣でんと全國より集る人々で佐倉町に下車する人がかなり少ないのである。

宗吾は、佐倉領民であつたといふだけで、現在の佐倉町には宗吾に因縁める何物もない。たと舊佐倉城の跡が今は兵營となつて居ることは前に述べた。



靈堂を管理するは、やはり此の地の鳴鐘山東勝寺で、現貫主は、三好照嘉僧正である。

宗吾父子の處刑後、其時の菩提所であつた東勝寺の住僧が、その遺骸を請ふて今の靈廟に埋葬したのである。

後、東勝寺の累代の住持が、相續いて、此の偉靈を守護して今日に及んで居る。隨つて神社ではなく佛堂である。

(一三) 宗吾精神の目ざめ

宗吾は生前一の田舎名主に過ぎなかつた。而も彼の死後の感化は實に偉大である。

彼が一生の悲壯、壯烈な最後は、佐倉領の百姓を感動せしめ、涕泣せしめたに過ぎなかつたが、今日では「天下の宗吾」として、彼の精神、彼の生涯は、天下の人を鼓舞し、感動せしめねば止まぬ。

『至誠天に通ず』

宗吾は、生前には領主から憎まれ、領民から慕はれたが、其死後には、領主、領民、いづ

れからも慕はるゝに至つた。そして今は、彼の靈前に脱帽せざる日本人は無くなつた。
 而も宗吾が日本人の宗吾であることは、もはや數十年を出でないであらう。釋迦が印度の
 釋迦でなく、キリストが猶太のキリストでなく、孔子が支那の孔子で無くなつたやうに、世
 界人類の救世主としての宗吾は、必ずや百年を出でずして認識さるゝに相違ない。
 至誠は貴い、博愛、犠牲の精神は貴い。慈悲、仁俠の心は無限の生命を鼓動する。

※ ※ ※ ※ ※

宗吾は今の代議士だつた。

頭を下げて、金の力で買収して歩いた代議士でない代議士だつた。

虚名を博するためや、利権漁りを目的としない代議士だつた。衆望を一身に受けて、大勢
 のために身を殺して仁をなした理想的の代議士だつた。

頭をさげて、三拜九拜して、投票をかき集めて、そして代議士になつた今の代議士達は、
 一體何をして居るのか、何を爲さんとするのか。



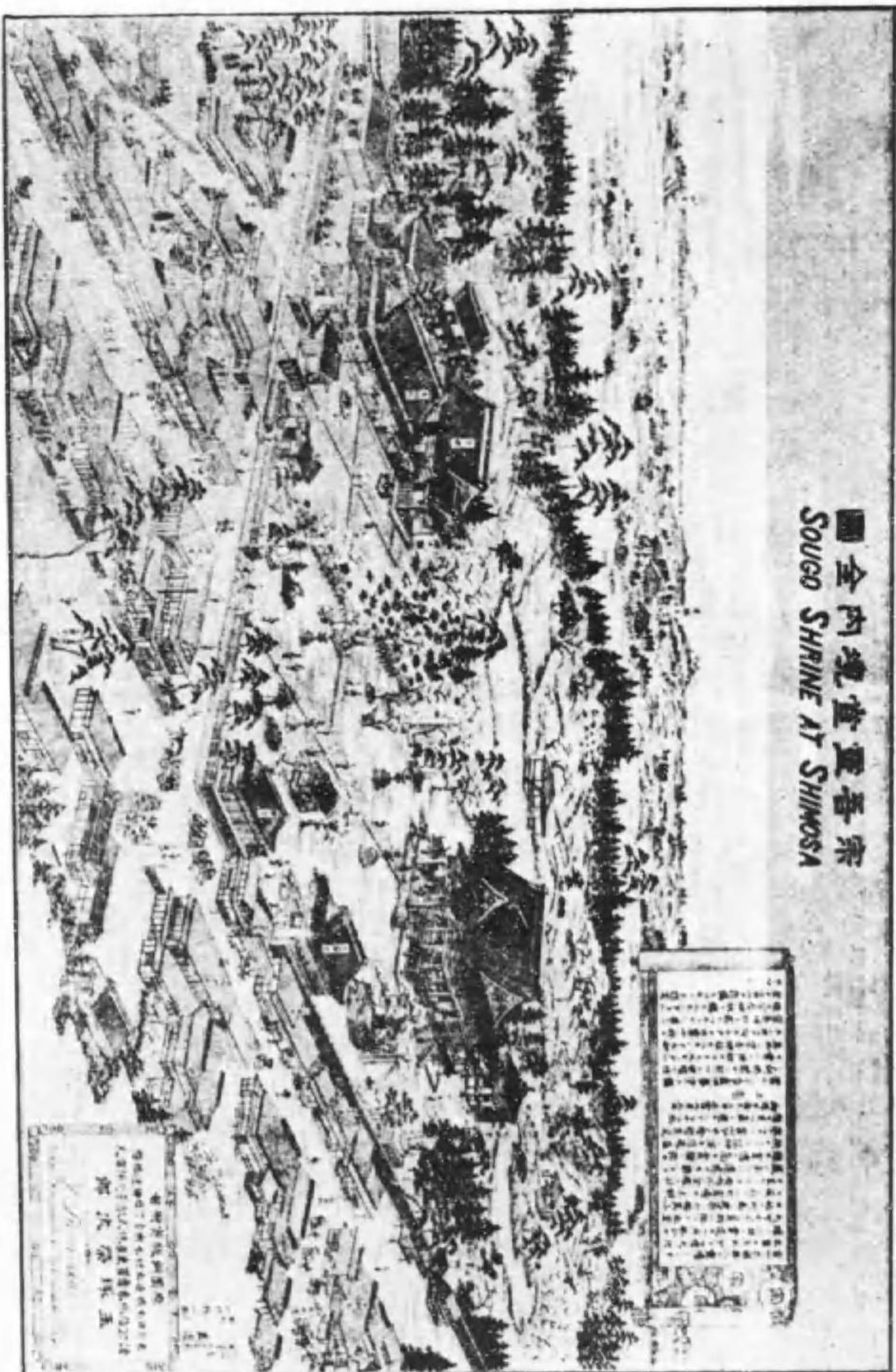
宗吾大靈堂を完成せる高僧故田中照心大僧正

代議士よ、何處へ行く。政黨よ何處へ行く、憲政よ何處へ行く。
議政壇上三百の頭顱よ。一人の宗吾は無いのか。一人の甚兵衛は出でないのか。

人のため、世のためにとの念は、あまりにも國民の頭から薄らいで行く。犠牲の念、奉仕の心、仁俠、義勇といった精神が、この地上から没し去るのではあるまいか。民意を代表し、多衆のために貢献すべき代議士すらが、自己一身の利害のために節を賣り、一黨一派の利権のために國家を忘れ、國民を忘るゝ悲しむべき世になつた。「宗吾的精神の目ざめ」は、今こそ、心ある士の干天に待つ雲霓よりも望ましいものでなければならぬ。

一身はもとより一家血縁の生命を擧げて大衆のために犠牲とした宗吾の崇高悲壯な精神を仰ぎ見るとき、今更ながら襟を正しうせざるを得ぬ。

幕前に額つき、靈堂にひれ伏して、低徊願望去るに忍びざるがうちに、いつか黄昏の餘光に彩られた一叢の雲が、西に東に去來し始めた。(完)



● 全内境 靈香 宗
SOUGO SHRINE AT SHINOSA

SHINOSA
SHRINE
AT
SHINOSA

宗吾靈堂詣で案内

東京から靈堂へ

東京兩國驛とうきょうにこくごうえきから成田驛なりたえきまで約二時間やくにじかん（此賃金兩國驛このちんぎんにこくごうえきから三等とうとうで金一圓三錢きんいちげんさんぜん）成田驛なりたえきで下車げしやして宗吾靈堂そうごれいどう行の電車でんしゃに乗りかへ、（賃金十九錢ちんぎんじゅうきゅうぜん）十五分かんぱん乃至十分じふぶんかゝると宗吾靈堂そうごれいどうに着つことが出来る。

或は東京押上驛あるひとうきょうおしあげえきから京成電車けいせいでんしゃを利用して途中宗吾驛とちゅうそうごえきで下車げしや（賃金八十一錢ちんぎんはちじゅういちぜん）するもよい。

宗吾驛そうごえきからは靈堂れいどうまで五六丁ごろうぢやうはある。此間このあひだには乗合自動車のりあひじどうしゃの便べんもあつて、三十錢さんじゅうぜんで行ける。

宗吾靈堂

二

靈堂の門を入ると、右手にお墓がある。先づお墓に参拜し、本堂を拜し終れば右側の五靈堂に参拜するがよい。宗吾と共に總代となつて訴狀に名を連ねた人々の靈を祀つたのがこれだ。

堀田家から贈つた墓標や、その他の由緒ある記念物が、本堂を中心としていろいろ建てられて居る。

本堂の裏に甚兵衛の小祠がある。

その右手にあたつて、宗吾御一代館がある。

宗吾舊宅と麻賀多神社

靈堂から道を北方にとつて、約十三四丁のところに宗吾舊宅があり、その少し手前に、宗吾の氏神なる麻賀多神社がある。此の間にも乗合自動車の便があり、四五十錢拂へばこれを利用することが出来る。

宗吾舊宅は、實は宗吾の妹の家であるといふが宗吾父子の位牌があり、参詣人の香煙がいつも絶えない。

甚兵衛渡し

舊宅から甚兵衛渡しの見晴茶屋までは數丁に過ぎぬが、(此間は自動車で行ける(二三十錢)水神の森まで行くには、湖畔の細道を通つて、舊宅からいへば約二十六七丁はある。此間は徒歩で行かなければならぬ、併し靈堂へ参詣する者は是非この甚兵衛渡しまで歩を運ぶべきである。

三

尙この宗吾舊宅から程遠からぬ所に理兵衛屋敷（宗吾の屋敷跡）がある。

四

大佛頂寺

甚兵衛渡しから宗吾靈堂へ引かへしたら、更に光全和尚の大佛頂寺に參詣するがよい。

此間も自動車で行かれる。光全の用ひた駕籠や、自像などがある。靈堂から南方約十一二丁はあらう。袈裟掛けの松も此の附近の湖畔にある。

宗吾靈堂沿革概要

東勝寺、千葉縣印旛郡公津村に在り鳴鐘山と號す。新義眞言宗豊山派に屬し現に別格本山たり。

往時桓武天皇の御宇坂上田村麿東夷征伐の砌、地方豪族の巢窟を破り戦歿供養の爲め一字を建立し東勝寺と號すと、其後里見殘黨の兵戰に罹り一山烏有に歸せしが寛文八年澄祐上人現れ伽藍を再興し舊觀に復す以此中興の祖となす舊時境内に龍性院、寶積院の二ヶ寺及外に十有餘ヶ寺の末寺を有し又數十石の御朱印を附せられ下馬標さへ存したりと。本尊大日如來は千葉家の寄進に成り同家累代の祈願所たり。

降て承應二年舊八月義人宗吾父子越訴の罪を以て元公津ヶ原（現境内靈廟の

六

地)に於て父子五人嚴刑に處せらるゝや時の菩提所として東勝寺住僧來賢僧都遺骸を請ひ該所に埋葬す。今の靈墳是なり。文政十年八月追善供養の爲め墓側に一字を建立、嘉永年中照如和上堂宇を再興し明治初年照心僧正に至て靈域の痛く荒蕪せるを慨嘆し明治廿一年十一月宗吾供養堂外四字を完成し面目を一新せり然るに可惜明治四十三年九月門前に劫火起り一山烏有に歸す。爾來復舊工事に衝り現在の大本堂は大正二年五月起工總費額約百萬信施に因り同十年十一月十間四面總樺總銅葺壹宇完成盛大なる遷座入佛の式典を舉行せらる。

方今交通機關の施設日と俱に完備し其の餘澤を讃仰し來詣するもの日に増し月に加はり絡繹として不絶例年九月二日三日兩日の宗吾靈例祭には廣袤五町餘歩の境内立錫の餘地なく信男信女を以て埋む、義人靈威赫灼として輝き旭日と其靈光を競ふものと謂ふ可し。

—編會揚顯德靈吾宗—
記 驗 靈 御 吾 宗

萬民の飢饉を救はんがために、宗吾の遺徳を顕揚し、其の靈光を競ふものと謂ふ可し。宗吾の遺徳を顕揚し、其の靈光を競ふものと謂ふ可し。宗吾の遺徳を顕揚し、其の靈光を競ふものと謂ふ可し。

◇ 宗 吾 甚 兵 衛 語 語 ◇

發行所 宗吾靈德顯揚會 振替東京五六九番 電話九段三四五三六三七三六三八	不許複製 著者 上村藤若 發行者 上村藤若 印刷者 山越今朝太郎	昭和五年三月二十七日印刷 昭和五年三月三十日發行 定價三拾錢
	東京市神田區一橋通町廿一 教育會館(帝國文化協會內)	東京市神田區西小川町一九 山越今朝太郎

廣く淨財を
仰いで
宗吾靈本坊の建立

宗吾尊信者の擧つて後援されむ事を。

天空を摩する宗吾靈堂は偉人の英魂を永遠に奉安するに適はしいものであるが、今回靈堂にては更に二十五萬圓の豫算を以て本坊の建立に着手せられて居る。宗吾的精神の目ざめを全國的に呼號せられんとする憂國熱情の士の擧つて贊助出捐せられん事を希望す因みに右本坊建立寄附金取扱規定中主なるもの左の通りである。

- ◇寄附金は千葉縣印旛郡公津村宗吾靈堂（振替口座東京一七二二五番）へ直送のこと
- ◇寄附金は多少に拘らず宗吾靈堂より受納書並に御守札を呈し、芳名を臺帳に録し永代毎朝福社安寧を祈願す。
- ◇寄附金一圓以上には記念お守並に御札、三圓以上には、金欄三ツ折お守並にお札五圓以上には特別金欄お守並に御木札、十圓以上には其他に感謝狀、三十圓以上には其他に永代年々御木札を、五十圓以上には厨子入御尊像御木札感謝狀並に永代年々御木札を、百圓以上には其他に芳名を仙臺石に列刻し、尙多額の寄附者に對しては希望により臨機取扱をなす定めである。

宗 吾 名 物

宗吾靈堂御參詣者は

是非々々 お立寄りを。

史實も芳ばしい

甚兵衛そば

甚兵衛屋
總本家
渡屋甚兵衛

帝國文化協會地方委員囑託

- 一、本協會の奉ずる民族精神の統一、國民思想淨化の運動は今や全國的に白熱化して居る。
- 二、此の運動を一層普及徹底せしめ本會の會員として修養向上に志す青年男女を更に一人でも多からしめんがために、各地に本會の委員を囑託し、これが運動を依頼する次第である。
- 三、此の意味に於て、此の國家的大事業に参加して、一臂の勞をおかし下さらんとする青年男女諸君は、擧つて本會地方委員に御應募を願ひたいものである。
- 四、町村の委員を帝國文化協會何々町(村)委員と稱し、工場學校等の委員を帝國文化協會何々工場(學校)委員と稱する。其勞に酬ゆる方法は別に規定されて居る。
- 五、進んで此運動に参加さるゝ方は、見本機關雜誌新聞並に規定書等の送費として郵券三十錢を東京市神田區一ツ橋通町廿一(教育會館)帝國文化協會本部へ送附されたい。

帝國文化協會三大機關雜誌

學校、青年團、軍隊、官廳、工場の指定雜誌

向上之青年

新時代の青年が修養練磨の道場。進む世界に遅れざる文華の寶庫。

女學校、處女會、婦人會、會社、官廳、工場の指定雜誌

向上之婦人

自己を愛し家庭を愛する婦人の相談相手。眞の幸福を求むる女性の親切な案内者

小學生、女學校下級生、年少處女會員、女工員の指定雜誌

向上之少女

明るく、清く、正しい少女の指針、女性らしき女性を育くむ母體

三大雜誌 定價もと
 部 一 年 半 一
 部 二 年 一
 錢 十 二 部 一
 錢 十二圓 一
 錢 十三圓 二
 (除免稅郵) (除免稅郵) (除免稅郵)

發行所

東京市神田區一ツ橋通町廿一(教育會館)
 振替口座東京六七一六六番

帝國文化協會

終

